



受入れて下さった自治体の方から災害時の様子を聞くSEEDS Asia職員（丹波市）
SEEDS Asia staff listening to one of the local community members about the disaster（Tamba City, Japan）

Newsletter

ソフトバンク株式会社のアプリ「かざして基金」で、下記SEEDSのロゴをかざすと簡単にご寄付いただけます。

● Table of Contents Vol.65(Jul., Aug. 2018)

- ・ バングラデシュ : バングラデシュ都市部におけるコミュニティ防災力向上事業
 - ・ インド : バラナシ市における参加型コミュニティ防災推進事業
 - ・ ミャンマー : ヒンタダ地区における学校・地域防災支援事業
 - ・ フィリピン : セブ州における学校の防災管理推進支援事業
 - ・ 日本 : (1) ボランティア活動
(2) 講師派遣
-
- Bangladesh : Project on Capacity Building for Community-Based Disaster Risk Reduction in Urban Areas of Bangladesh
 - India : Project for Participatory Community-Based Disaster Risk Reduction Approaches in Varanasi
 - Myanmar : Enhancing Comprehensive School Safety in Collaboration with Community in Hinthada Township
 - Philippines : Support Project on Promotion of School Disaster Risk Reduction and Management in Cebu Province
 - Japan : (1) Volunteer Activity
(2) Send SEEDS Asia Staff to Lecture



特定非営利活動法人SEEDS Asia

〒658-0072

神戸市東灘区岡本3-11-30-302

3-11-30-302 Okamoto,
Higashi Nada ku, Kobe, Japan

Tel : 078-766-9412

Fax : 078-766-9413

Email : rep@seedsasia.org

Web : www.seedsasia.org

Facebook : <https://www.facebook.com/SEEDS-Asia-206338119398923/>



バングラデシュ

バングラデシュ都市部におけるコミュニティ防災力向上事業

【JICA草の根技術協力事業】

北ダッカ市住民の災害対応能力の向上を目指し、コミュニティにおける防災活動を促進しています。

●犠牲祭

イスラム教では、年に2回イードと呼ばれるお祭りがあります。一つ目は断食をするラマダン月明けのイード、二つ目は犠牲祭として知られるイードです。この犠牲祭のイードが、8月末にありました。3日間の休日となるイードは日本のお正月やお盆のような雰囲気、人々は家族と過ごすため故郷に帰省し、ダッカは空っぽになります。犠牲祭では牛や山羊を神に捧げますが、寄付の文化が根付いているイスラム社会では、犠牲祭でいただくお肉は小さく切って3等分され、ひとつは自分と家族に、ひとつは親戚に、そしてもうひとつは貧しい人々に分け与えられます。私たちが活動するコミュニティでも多くの人が帰省していましたが、彼らも9月はじめにはダッカに戻り、また精力的に活動を始めています。

●北ダッカ市が広報誌を発行！

昨年9月に実施した本邦研修で神戸市を訪れ、同市が発行する広報誌とそれを通じた防災啓発の取組みを知った北ダッカ市職員は、自市での発行を研修後のアクションプランに盛り込んでいました。昨年より広報室を中心に内部での調整と準備を進めていましたが、7月ようやく第1号を発行することができました。SEEDS Asiaは、企画から発行まで一連の作業をサポートしました。これまで、バングラデシュでは市が広報誌を発行している例はなく、北ダッカ市が初となります。広報誌の名前は、公募で集められた約200の候補の中から『Nagoria(“市民”の意)』と名付けられました。ゴミ問題やインフラ整備の問題で批判の対象になることが多い北ダッカ市ですが、市の課題は住民の参加なしには解決できません。広報誌を通して、積極的に情報公開をして市民とのコミュニケーションをとっていくこと、市が提供するサービスについて分かりやすく紹介し市民生活をよりよいものにしていくこと、そして各種課題について啓発を行い市民の意識を高めていくことを目指しています。



北ダッカ市広報誌『Nagoria』第1号と記者会見で発表を行う市の幹部ら

初めての広報誌作成に当たっては、企画や内部での承認手続き、各部署からの記事集め、レイアウトや編集などを手探りでを行い、非常に時間と労力がかかりましたが、メディアにも大々的に取り上げられ、また、市民に歓迎され、市長をはじめ市職員は大きな手ごたえを感じています。広報誌は、25万部印刷され、土地保有税納税者の各家庭に郵送で届けられるとともに、区長事務所に置かれています。また、市のホームページにもアップロードされ、誰でもアクセスできるようになりました。本邦研修を通じた日本での学びが少しずつ形になっているのをとても嬉しく思います。

●防災用具整備とコミュニティ災害対応チーム実技研修



実技研修の様子

防災コミュニティでは、災害時に素早く対応することができるよう、本部、救助班、消火班、応急処置班など、チームを作って役割分担を行っています。平常時、災害時におけるそれぞれのチームの役割を話し合う中で、防災リーダーを中心に、災害時必要になる用具をリストアップし、その整備に着手しています。災害用具は、必要なときに使えるよう、コミュニティの事務所に保管されています。事務所に保管することでより多くの人の目につくようになり、これをきっかけに防災に関心を持つ住民が増えているようです。

これに続き8月より、各防災コミュニティにて初期消火と応急処置に焦点を当てた実技研修を実施しています。8月11日にはまずパイクパラコミュニティで実施、区長もかけつけて終日参加しました。この実技研修は、災害対応チームに参加する地域のボランティア向けに、より時間をかけてスキルを教えてほしいという防災リーダーたちからの依頼で実施が決まりました。また、最寄りの消防署からトレーナーとして消防隊員に来てもらうことで、コミュニティと消防署のつながりをつくる狙いもあります。日本ではヒーローと扱われる消防隊員ですが、バングラデシュでは事情は違います。つい5年ほど前まで、消防隊員は現場に行くと人々に叩かれていました。これには、十分な設備や技術がなく、現場への到着が遅れてしまうという背景がありました。現在では、組織や設備の整備、隊員への適切な訓練で、災害対応のプロとして人々に受け入れられています。消防署を巻き込んだ実技研修は来月も引き続き実施していきます。

バラナシ市における参加型コミュニティ防災推進事業

【外務省 日本NGO連携無償資金協力事業】

教材開発や防災活動の拠点づくりなどの取り組みを通じて、市民の防災意識の向上を目指します。

インド

●本邦研修

8月27日から9月1日の6日間、国家災害対応部隊（NDRF）第11隊隊長代理を団長に、バラナシで防災に取り組んでいる市民6名が「コミュニティ防災」視察のため来日しました。バラナシでは県に一人防災専任の担当者がいるのみで、地方行政主導で防災を推進していくことがとても困難な現状です。こういった背景から、市民一人一人が防災力を高め、自助と共助を推進していくことが重要で、インド政府もNDRFによる市民・学校向け防災トレーニングを定期的実施しているところです。今回の本邦研修では、京都市消防局や消防団の取組み、また市民による自主防災組織の取組み、清水寺と周辺コミュニティによる文化財を守る取組み、京都府内大学生による防災への取組み、そして学校と地域が連携した交通安全の取組みなど、市民がいかに様々なアクターと協力して防災を進めているかを学びました。行政と市民の取組みにより火災件数を1955年のピーク時より20%程度にまで減らすことができたこと、ゴミの量も2000年のピーク時より半減できたこと、市が運営する市民防災センターに平日にも関わらず親子連れが多く訪れ防災の勉強をしていること、高倉小学校のシェイクアウト訓練で教員に指示されなくとも1年生から6年生まで警報アナウンスが出ると数秒で自分自身の身を守る行動をとる事ができたこと、などなど実際に関係者から見たり聞いたりすることで、京都市に根付いている市民防災力を感じ取ってくれたようでした。私たちが現地で日本の事例をお話しをするだけではなかなか通じないことが多く、「百聞は一見に如かず」を実感した1週間でした。帰国前のアクションプラン作成では、今回学んだことを自国での取り組みに是非活かしていきたいという強い意気込みを感じることができました。



京都市長表敬

本視察研修は、京都市長表敬のご調整はじめ、バラナシ市とパートナーシティ提携意向書を結んでいる京都市の全面的なご協力のもと実施されました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

●市民防災大使任命！



市民防災大使任命式

6月に3日間の防災研修を受講したバラナシクラブとロータリークラブの参加者は、その後、自分たちの職場、学校、地域住民向けの活動を積極的に行ってくれています。特にバラナシクラブのメンバーは、地元ラジオ局で防災について話したり、毎週日曜日に心肺蘇生のトレーニングを実施したりと、本当に素晴らしい活動を続けてくれています。そこで、NDRFとSEEDS Asiaは、特に今後も積極的に防災を広めていってほしいことが期待できる13名を「市民防災大使（ブランドアンバサダー）」として任命することになりました！その任命式が7月20日行われました。今後の活躍に期待したいと思います。

●防災教育アプリの現地テスト実施

7月19日から26日まで、防災教育専門家とともにバラナシを訪れ、開発中の防災教育アプリの第一回現地テストを実施しました。現在開発できている機能確認、画面の見やすさ、インドの文化的に受け入れられるかなど、より良いものにしていくためのヒアリングを、クライメートスクールの教員や生徒、地域防災協議会メンバーに実施しました。インドでもスマートフォンの普及はかなり進んでおり、ヒアリングでは防災アプリに対する好意的な意見が多く聞かれました。今回のヒアリング結果をもとに、開発は続けられており、10月に完成予定です。



ミャンマー

ヒンタダ地区における学校・地域防災支援事業

【外務省 日本NGO連携無償資金協力事業】

教育と防災の拠点となる学校建設から地域の防災力向上まで、ハードとソフトを合わせた包括的な防災を推進しています。

エヤワディ地域ヒンタダ地区ナバーゴン村で建設中のシェルター機能を備えた学校に長い雨季がやってきました。7月には基礎工事がほぼ終了しており、内装工事に着手している中、住民らが教員向けに学校や避難所の運営に関わる継続的な研修・協議会も定期的に行っています。以下、7月から8月の活動を報告いたします。



8月の時点の教室内部

●第4回ワークショップ ～WASH（水と衛生）～



正しい手洗いの方法を学ぶ様子

ナバーゴン村では毎年雨季の洪水時には、安全な飲み水や清潔なトイレへのアクセスに限られる他、下水の処理施設が無いため感染症が流行します。特に、建設中の学校兼シェルターを今後、災害時に運営するには、正しい水と衛生の管理とその意義を知ることが不可欠です。したがって、8月5日に実施された第4回目のトレーニングでは、ミャンマー赤十字の協力のもと、WASH（水と衛生）について学びました。ナバーゴン村の参加者37名は、正しい手の洗い方、飲み水の確保の仕方、料理に使う水の安全性を保つ方法など、実践的な知識を多く習得しました。安全な水と衛生は、雨季真っ只中のナバーゴン村にとって非常に重要な問題のため、質疑応答の時間では、次々と手が挙がるほどの関心の高さでした。

また、これら水と衛生の知識は、村全体に共有されるべきだとして、ワークショップの参加者21名が自主的に、ワークショップの学びの共有会を8月15日に開催しました。共有会には、村の115人が集まり、特に洪水時に流行る感染症の防止方法や、安全な水の確保の仕方について話し合いました。ナバーゴン村でも洪水時、特に水へのアクセスが困難な家庭を特定し、互いに助け合う協力システムが新しく構築されました。

●第5回ワークショップ ～応急処置の基礎スキル習得～

続いて、8月25日から26日にかけて行われた第5回目の防災ワークショップでもミャンマー赤十字の協力を得て、応急処置（First Aid）について学びました。医療施設が近くにないナバーゴン村の人々は、特に災害時のことを考え、自分たちで応急処置ができるよう、その手順や方法を学びたいと、以前から話していました。結成された村の防災委員会の応急処置班のメンバーはじめ35名が参加し、怪我の手当てや心肺蘇生法について、実践的に学びました。村の参加者はトレーニングに熱心に打ち込み、終了時には、参加者全員が心肺蘇生の手順を正しく示すことができました。ナバーゴン小学校の教師のスウェ・マー・ウィン氏は、「学校には小さい子どもがたくさんいるため、災害時の応急処置は教師が知っておくべきことだと思います。正しい包帯の巻き方など、実践的なスキルを学べたのはとても良かったです」と、効果を語りました。



心肺蘇生法を学ぶ様子



フィリピン

セブ州における学校の防災管理推進支援事業

【JICA草の根技術協力事業】

学校における災害リスク管理力の向上を目指した取り組みを実践しています。

●第1回 国レベル中間報告会カンファレンス

7月31日に、教育省防災管理局とともに、マニラ首都圏ケソン市にて、第1回国レベル中間報告会カンファレンスを開催しました。開会の部では、教育省事務次官アラン・パスクア氏、第7地方事務所長ジュリエット・ヒルタ氏、JICAフィリピン事務所次長大島歩氏がそれぞれフィリピンにおける防災管理推進の重要性についてメッセージを述べました。今回の報告会では、本事業の関係機関やこれからフィリピンで災害に負けないコミュニティづくりを目指す機関に対し、事業の進捗状況や目指す成果、今後の活動予定を報告するとともに、包括的学校防災の3つの柱①安全な学校施設②学校防災管理③教育における防災について、SEEDS Asia、教育省防災管理局、震災・学校支援チーム〔EARTH〕（兵庫県教職員による災害時学校支援組織）が、発表・共有しました。参加者はフィリピン国内全ての地方から地方事務所長をはじめとした各部署からの代表者、さらに中央政府機関とマカティ市やセブ州などの地方自治体、教育省パートナーなど約100名に及びました。参加者からは、「減災のコンセプトについて深く理解でき、なぜSEEDS AsiaやJICAを通じて日本政府がフィリピンを支援する必要があるのか分かった。SEEDS AsiaやJICAは教育や人を重視している。」などというフィードバックをいただきました。



EARTH員によるプレゼンテーション

●EARTH員研修、学校安全点検



EARTH員研修の様子

8月1日に、マニラ首都圏ケソン市にて兵庫県震災・学校支援チーム〔EARTH〕を講師にお招きし、学校防災管理指導チーム13名への研修を実施しました。講義内容は、EARTHの活動や学校防災管理推進の取り組み、学校防災に向けた兵庫県教育委員会の活動内容でした。講義に加え、参加者は避難所運営の疑似体験ゲームを通し、楽しみながら避難所運営の大変さを学びました。参加者の1人は研修中の学びとして、「日本の制度から学びたい。正しい制度を持つことでフィリピンの防災文化も変わるだろう。」と述べていました。

8月2日には、EARTH、学校防災管理指導チーム、カルカル市防災管理局職員キム氏とともにカルカル市中央小学校を訪問しました。カルカル市中央小学校の教員12名を中心に、チェックリストを使いながら、校内安全点検を行いました。点検後、EARTH員によるフィードバックが行われ、「教員だけが取り組む防災ではなく、子供たちも巻き込んでいくことが重要。」など、有意義なアドバイスをいただくことができました。また、参加したカルカル市中央小学校の教員は「今日を機に、セブ州で最初の、1番安全な学校作りに向けて取り組んでいきたい。」との意気込みを表しました。

●学校防災管理運営指針ワークショップ

8月6日、7日に、セブ市内で学校防災管理指導チームと学校防災管理運営指針ワークショップを行いました。上述の国レベル中間報告会カンファレンスやEARTHによる研修、学校安全点検から学んだことを基に、学校防災管理チームの構成を見直しました。また、起こりえる災害時のシチュエーションでのシミュレーション訓練や、3つのシナリオ（①授業中②通学中③昼休憩中）ごとに標準の行動手順を考えるグループワークに取組みました。今回のワークショップでの内容は、学校防災管理チーム運営指針に反映されます。



日本

ボランティア活動

●平成30年7月豪雨後のボランティア

広範囲において土砂災害や洪水をもたらした平成30年7月豪雨（西日本豪雨）は、丹波市内にも浸水被害を及ぼしました。人命が失われることはありませんでしたが、兵庫県下で最も住宅被害が大きかったのは丹波市でした。

普段お世話になっている丹波市がこのような被害を受けたことから、SEEDS Asia本部職員と元職員、市民有志が集い、7月15日に土砂のかき出し作業をしました。この日は京都大学や関西国際大学の学生も参加しており、ボランティアセンターが取り扱っていなかった被災農業施設の周辺土砂のかき出しと、さらなる浸水被害を食い止める土のう袋の設置に取り組みました。

このボランティア活動においては丹波市復興推進室にご調整をいただき、また地元自治会の方々のご指導や心配りにより公民館を開放していただくなど、様々な方々にお世話になりました。また、活動にご賛同・ご寄付をいただいた皆様のお陰で、作業に必要な用具を購入し、より安全で効率的な活動をすることができました。この場をお借りして、皆様の温かいご支援に心よりお礼申し上げます。今回の豪雨では、4年前の豪雨災害の経験を踏まえ、行政の対応に加え、多くの住民が率先避難・垂直避難をしたことで安全が確保されたと聞いていますが、度重なる水害により地元の方々がこれ以上疲弊しないことを祈るばかりです。

今回の豪雨災害では、SEEDS Asiaが本部を置く神戸市の篠原台も土砂流入の被害を受けたことから、本部職員がボランティアで土砂のかき出し作業を行いました。

この度のボランティア活動に伴い、ご寄付で購入させていただいた用具は、今後災害時のボランティアでご利用になられたい方へ貸出を行います。ご利用の際には、お気軽にお問い合わせください。



作業をするSEEDS Asia関係者と関西国際大学の学生

講師派遣

●復興シンポジウムパネルディスカッションへの登壇



シンポジウムのパンフレット

2014年8月16日から17日を中心に丹波市を襲った丹波市豪雨から、4年が経ちました。丹波市復興推進室が8月19日に3回目となる復興イベント「心 つなぐ 和一処（わっしょい）」を開催し、SEEDS Asiaはその中のプログラム「復興シンポジウム 再び“あの日”へ、そして“明日”へ」のパネルディスカッション「あなたにとって災害は何であったか」にパネリストとして登壇しました。

パネルディスカッションに先行して、丹波市の劇団と、中越地震で被災した山古志村木籠集落の方々共演する「被災地間交流演劇会」や、兵庫県立大学の澤田雅浩准教授による基調講演がありました。演劇会では、自然が起こす災害と人の生き方を絡めた深いメッセージが繰り広げられ、参加者の目と耳をくぎ付けにしていました。澤田雅浩准教授による講演では、丹波市が災害後に回収している被災世帯へのアンケート結果を踏まえ、「災害から4年経った今、復旧が進み、災害を日常的に意識する機会が減り、復興への前向きさが中だるみになる傾向がある。逆にここで踏ん張れば、さらなる飛躍が期待できる」と、関係者を鼓舞していました。

パネルディスカッションでは、SEEDS Asiaの丹波市とのこれまでの関わりと、現在進めている復興（防災）スタディツアーを絡めて紹介しました。災害経験によって明らかになった地域力を丹波市の誇りとし、外部の方々に積極的に発信していこう、というメッセージを込めました。他のパネリストとして、流出土砂の集積地で新しい農業の取組みを進めている自治会の方や、災害当時に最も影響を受けた市役所支所で対応をし、その後も行政という立場から農林業の面で復興に取組んでおられる職員の方、そして丹波市内のボランティア団体のメンバーが、それぞれ自身の災害発生時の体験から、復興の展望を語りました。



Bangladesh

Project on Capacity Building for Community-Based Disaster Risk Reduction in Urban Areas of Bangladesh [JICA Grassroots Technical Cooperation Project]

● Eid ul-Azha – Festival of Sacrifice

There are two important festivals in a year in Islam called Eid. One is called Eid ul-Fitr at the end of Ramadan (the month of fasting), and the other is Eid ul-Azha known as the festival of sacrifice which is after 70 days of the first Eid. We observed the festival of sacrifice in the end of August this year. As it becomes a long holiday, it feels like Obon or New year's holiday in Japan as people go back to their native places to spend time with families, leaving the city empty. The Eid sacrifices animals such as cows and goats to god for happy and prosperous life. In Muslim society where the culture of donation, or sharing is enrooted, the meat is equally divided into three and given to one's own family, relatives, and the poor. In communities we work with also, many people went back to villages but they came back to Dhaka by September and started working on DRR again energetically.

● DNCC Published Its Newsletter “Nagoria” !

The beginning was our Japan visit in September last year. Officials of Dhaka North City Corporation (DNCC) incorporated newsletter publication into their action plans after visiting Kobe city government and its PR office and learned how the city had published newsletters over years to get connected with citizens. After internal coordination and preparation, the first DNCC newsletter was published in July! SEEDS Asia provided its technical support to DNCC throughout, from the planning to distribution. This is the first newsletter that a city issue in Bangladesh. The name “Nagoriya” which means “Citizen” was selected from about 200 name ideas given by the citizens in Dhaka. DNCC is often a target of criticism for issues such as waste management and infrastructure development, however, it is never be possible to tackle those issues without people's participation. DNCC aims to establish better communication with people, make the city life better by giving information on services the city provides, and raise awareness of various urban issues including DRR through the newsletter.



“Nagoria” first issue and the city's top management at a press conference

The first publication required a lot of time and effort for planning, internal procedures and formalities, gathering write-ups from different departments, designing and editing, and distribution. However, the initiative was taken up by media in a great way and also warmly welcomed by the citizens. 250,000 copies were printed and delivered to holding tax payers by post. It's also placed in ward offices as well as the city's website so that anyone can read it.

● DRR Equipment Preparation and Practical Skill Training



Community volunteers learning disaster response skills from Fire Service

Our DRR communities are in a process to form disaster response teams that include rescue team, first aid team, fire-fighting team, and others in order to effectively and quickly respond to disasters. While they discuss role of each team in normal time and emergency time, they listed up equipment that would be needed and started preparing them. The equipment is kept in their respective community offices so that anyone can use when required. Seeing the equipment kept in a community office, more residents are taking interested in DRR.

Following the equipment distribution, we have conducted a whole day practical skill training on firefighting and first aid in each community as requested by the community DRR leaders. Professional fire fighter from the nearest station is invited as a trainer, by which we aim to create a connection between community and fire station.

Fire fighters are often seen as heroes in Japan but that's not the case in Bangladesh. Till only about 5 years ago, firefighters used to be beaten by people because they used to reach sites after houses were burnt due to inadequate system, equipment, and skill. With all of that much improved, they are respected in the society today. Practical skill training with the fire service will continue in the coming months as well.



India

Project for Participatory Community–Based Disaster Risk Reduction Approaches in Varanasi

【 Ministry of Foreign Affairs of Japan (MOFA) 】

● DRR Study Visit in Japan

From 27th August to 1st September, 7 study-visit members involved in DRR activities in Varanasi, visited Japan to learn about “Community-Based DRR”. The study-visit team was led by Deputy Commandant of 11 NDRF (National Disaster Response Force). In India, shortage of government officials and experts who promotes DRR at the district level is one of the challenges to disseminate DRR widely at grass-roots level. In Varanasi, there is only one expert who manages the entire district. Therefore, strengthening each citizens’ DRR capacity, and developing the capacity of self-help and mutual help are essential. As a government initiative, NDRF regularly conducts DRR trainings for citizens and schools.

The study visit this year touched upon various DRR initiatives and groups in Kyoto, such as Fire Department of Kyoto City and Voluntary Fire Corps, Voluntary DRR Organizations by citizens, Kiyomizu Voluntary DRR Organization by neighbors to preserve cultural heritage, Kyoto Students Fire And Safety Team (FAST), and school and community working on traffic safety together. The delegation learnt how citizens commit to DRR activities as a part of society members. They found that DRR is widely spread and ingrained into the citizens in Kyoto by observing and listening face-to-face to the people living there: They were impressed by the fact that the number of fire incidents reduced by 20% compared to the highest incidents in 1955 with initiative of the government and citizens of Kyoto. Other interesting initiatives included: decreasing the volume of garbage in half compared to 2000, parents and children visiting Kyoto City Disaster Prevention Centre for Citizens run by the municipal government and study DRR even during the weekdays. They observed students from grade 1 to 6 of Kyoto Municipal Takakura Elementary School protect themselves within a few seconds without teachers’ instruction, when they heard the warning announcement at “Shake Out Training”.

SEEDS Asia has aimed to share Japanese lessons learnt and experiences during workshops or trainings including demonstrating ideas/contents that the study-team had never previously experienced. This study visit epitomized a “Seeing is believing” experience for them. One of delegates said “I am eager to bring back what we learnt through the visit to India and develop our DRR activities”.

The study visit programs were made possible with kind cooperation and coordination of Kyoto City, including a courtesy visit to the Mayor of Kyoto. SEEDS Asia would like to take this opportunity to express sincere appreciation to all Kyoto City officials and resource persons in Kyoto who made this study visit successful.



Courtesy visit to the Mayor of Kyoto

● Nomination of “Brand Ambassador”



The ceremony of nomination of “Brand Ambassador”

Members of the Benares Club and Rotary Club who participated in three-day DRR training in June, motivated people in their work place, school, community, and shared what they learnt at the training. For example, members of Benares Club are taking the initiatives such as introducing DRR at the local radio station and conducting CPR training every Sunday. As a result, NDRF and SEEDS Asia decided to nominate 13 members, who will disseminate DRR actively in the future, as “Brand Ambassadors”. The ceremony of nomination was held on 20th July. We look forward to seeing their active involvement!

● Trial Test Workshop on DRR Education App

From 19th to 26th July, SEEDS Asia visited Varanasi with a DRR education expert and conducted the first trial test workshop on the DRR Education App which is under development. Checking the function, visibility of each page, reviewing if the contents are culturally acceptable, and discussion with teachers and students of Climate Schools (CS) and Citizen Forums (CF) were conducted. They gave positive feedback on the App. The App is being developed based on the feedback and is scheduled for launch in October.



Myanmar

Enhancing Comprehensive School Safety in Collaboration with Community in Hinthada Township

【 Ministry of Foreign Affairs of Japan (MOFA) 】

We are delighted to share with you our progress for July and August on our project in Nabekone Village, Hinthada Township, in the Ayeyarwaddy Region. The construction of the school cum shelter is continuing with great care to safety standards for both the building and the working environment. Our workshops and training sessions for disaster risk reduction and community resilience have progressed with the hard work and enthusiasm of the village members. Please read below to learn more!



Class room of ongoing construction

●4th DRR Training Workshop : WASH (Water, Sanitation, and Hygiene)



Demonstrating how to correctly wash hands

Nabekone Village, in Hinthada Township, faces challenges in access to safe drinking water and sanitation facilities during the flooding season, which often leads to water-borne disease spreading throughout the community. Learning concepts and practical methods on safe water sanitation is especially pertinent to managing the school cum shelter during disaster times. Therefore, on 5th August, we conducted the 5th training on WASH (water, sanitation, and hygiene) with an expert from the Myanmar Red Cross Society. The 37 participants learned practical knowledge and skills such as the correct ways to wash hands, store cooking water, and secure safe drinking water. High interest was displayed as Nabekone Village is in the midst of monsoon season, and an active Q&A session followed.

The participants of the workshop recognized the relevance of correct understanding and knowledge of water and sanitation for the whole community, and proactively organized a WASH knowledge sharing session for all of Nabekone Village. 21 workshop participants shared knowledge with 115 villagers, including how to prevent water-borne diseases from spreading and ways to secure safe drinking water. The session led to a discussion of how to support especially vulnerable households during flooding season, and a village cooperation mechanism was formed.

●5th DRR Training Workshop: First Aid

Following the workshop on WASH, the fifth DRR workshop was conducted from 25th to 26th August on First Aid. An expert from the Myanmar Red Cross Society with over thirty years of experience joined the training to teach participants skills ranging from proper bandage application to CPR. The need for First Aid training had been advocated by Nabekone villagers as they do not have access to proper health facilities. 37 participants, including members of the First Aid section of the Village Disaster Management Committee learned and practiced basic skills for an intensive two day course. At the end of the training, all 100% of the participants could answer and practically conduct CPR correctly. Daw Swe Mar Win, a teacher at Nabekone Primary School, commented, "I think that teachers will have to be prepared to apply first aid at schools especially as there are many young children who can get hurt. It was a great training because I gained many practical skills such as proper bandaging."



Practicing CPR



Philippines

Support Project on Promotion of School Disaster Risk Reduction and Management in Cebu Province

【JICA Grassroots Technical Cooperation Project】

● 1st National Conference on the Promotion of School Disaster Risk Reduction and Management

On 31st July, SEEDS Asia together with Department of Education (DepEd) Disaster Risk Reduction and Management Service (DRRMS) organized 1st National Conference on the Promotion of School Disaster Risk Reduction and Management (SDRRM) in Quezon City, Metro Manila. DepEd Undersecretary Mr. Alain Del B. Pascua, Regional Director of Region 7 Dr. Juliet Jeruta, Senior Representative of JICA Philippines Ms. Ayumu Oshima, delivered opening messages. SEEDS Asia, DepEd DRRMS, and EARTH (Emergency And Rescue Team by school staff in Hyogo) from Japan were main speakers of topics which covered all Pillar 1, 2 and 3 of Comprehensive School Safety. Participants were Regional Directors, Education Support Services Division (ESSD) chiefs, Regional DRRM Coordinators from all Regions, selected Schools Governance and Operations Division (SGOD) chiefs, national government agencies, local government units from Makati City and Cebu Province, DepEd Education Resilience Working Group and Education Cluster Partners, etc., totaling around 100. Participants gave positive feedback such as “The discussions provided us a deeper understanding of DRR concepts and why the government of Japan has to extend assistance in the Philippines through its different organizations like SEEDS Asia, JICA, etc., which is because they value education and their people.”



Presentation by EARTH

● Training and School Safety Inspection with EARTH

On 1st August, SEEDS Asia conducted Capacity Building Training by EARTH to 13 members of School Disaster Risk Reduction and Management Instructing Team (SDRRM-IT) in Quezon City, Metro Manila. EARTH delivered lectures about initiatives and efforts of EARTH and Hyogo Prefectural Board of Education (Hyogo BoE) on the promotion of SDRRM. Participants also enjoyed a game about evacuation shelter management. A participant told that “The Japan’s system that the training showed to me will change our culture.” as his most significant learning during the training.

On 2nd August, SEEDS Asia visited Carcar City Central Elementary School to conduct a School Safety Inspection together with EARTH, as well as some members of SDRRM-IT and Mr. Kim, the DRRM Officer of Carcar City Government. 12 teachers of the School attended to the inspection using a developed inspection checklist by the SDRRM-IT after which EARTH provided practical and meaningful advice. One of the participants said excitedly, “I would like to make this school the first and the safest school in Cebu Province.”



EARTH Training



Safety inspection at Carcar City Central Elementary School

● School Disaster Risk Reduction and Management Team Operations Guideline Workshop

On 6th and 7th August, SEEDS Asia conducted SDRRM Operations Guideline Workshops with SDRRM-IT in Cebu City. The SDRRM-IT were encouraged to review SDRRM Team composition and participate in simulation exercises. These contents will be reflected in the revision of SDRRM Operations Guideline.



Japan

Volunteer Activity

● Volunteer Activity after 2018 Japan Floods

The downpours in July 2018 affected a wide area of Japan, causing landslides and floods. Tamba City was no exception, and encountered the biggest number of damaged houses in Hyogo Prefecture.

As SEEDS Asia has a lot of collaborations with Tamba City, its members, former members and their families gathered together to work as volunteers on 15th July. On the same day, students of Kyoto University and Kansai University of International Studies also joined the activity to serve at an agricultural facility which had been covered by sediments from the mountains, yet was not dealt with by the local volunteer center. The activity was removal of sediments and making sandbags with the sediments to avoid further inundation of the facility from possible succeeding rainfalls.

Tamba City Recovery Promotion Office arranged this activity and local community members warmly accommodated SEEDS Asia with kind instructions and considerations, including providing the participants with their community hall to use as the restrooms and for changing clothes. SEEDS Asia also would like to take this opportunity to express sincere appreciation to the people who supported and donated to this activity. The equipment purchased from their contribution was fully used on that day and made the activity safer and more efficient.

While hearing that the residents and the government officials made use of their own lessons learnt from the disaster of four years ago, including taking initiatives in evacuation in early times or to upper floors when the rain took place, it is truly hoped that a number of the same kind of disasters is not causing the local residents to be worn out.

This torrential rain also affected Shinohara Dai in Kobe City where SEEDS Asia headquarters is located. Therefore, as volunteers, SEEDS Asia members visited the affected area to support removal of sediments on 14th July.

The equipment which was purchased from the supporters' contributions will be lent to those who want to join volunteer activities when any disaster happens in the future. Please contact us, should you need additional information.



SEEDS Asia staff and students from Kansai University of International Studies volunteering at the affected community

Send SEEDS Asia Staff to Lecture

● Presenting at the Panel Discussion in Tamba City's Symposium on Disaster Recovery



Brochure of the symposium

It has been four years since huge torrential rain hit Tamba City from 16th to 17th August in 2014. The Recovery Promotion Office of the City organized a third commemorating event for the disaster called "Bridging Hearts – WASSHOI" on 19th August, and SEEDS Asia was invited to present as a panelist in the panel discussion "What did the disaster mean to you?" as a program within the "Symposium on Disaster Recovery – Going Back on That Day, and Moving on to Tomorrow".

Prior to the panel discussion was a collaborative theatre play by groups in Tamba City, and in Kogomo District in former Yamakoshi Village. The latter was affected by the 2004 Chuetsu Earthquake, so this play was called the "Interactive Play between Disaster-Affected Areas", wherein meaningful messages about the relations between nature-induced disasters and people's ways of living attracted the audience. Following this was the keynote lecture by Dr. Masahiro Sawada of University of Hyogo. Dr. Sawada emphasized that a four-year anniversary could be a time when people get less conscious about the past disaster as restoration works are complete, resulting in less interest in disaster recovery. Yet, he encouraged the audience by stating that it is a good step towards further positive moves if the people in the affected areas can hold on to get over this slump.

In the panel discussion, SEEDS Asia introduced its ongoing initiative of Disaster Recovery (Disaster Risk Reduction) Study Tour as well as its past collaborations with Tamba City. The overall message was about taking pride on the great energy/thrust of the local communities in Tamba City, and disseminating it to people outside. Other panelists were: a community member whose team started a new agricultural initiative with sediments washed away from the mountains; a local government official who was in charge of the most heavily affected area, and currently working towards disaster recovery in the field of agroforestry; and a member of a local volunteer group. All of them shared their exceptional experiences of the times of the disaster and their own perspectives for recovery.